妻に叱られて⑲

Xデーで、叱られたこと

土居　修

「妻が叱る」とき、「妻に叱られる男」のあわれさを私は身に纏う。なんと幸薄いことよと嘆くしかない。ちっぽけな男の美学にすがり馬齢を重ねただけの人生のつけが回っているのだろう。

「が」も「に」もともに格助詞。前者の「が」は動作の主体を示し、後者の「に」は動作・作用の源を表す。元国語教師としての威厳をもって考えてみても、やはり、であった。妻の圧倒的な存在感。この他愛のないシリーズ(?)の屋台骨をささえているのはまぎれもなく妻。厳然と、煌びやかにささえている。国語文法でさえも私がしがない脇役であることを実証する。せつない、のである。

閑話休題。この拙稿を連載していただいていることに対し、事務局の方々をはじめ高退協の会員のみなさまに深甚なる感謝の意を表する次第。どのような生を経れば、こうした度量の大きさと慈愛の深さを備えることができるのだろうか。忸怩たる思いで振り返る。「人生に正解はない」と豪語しながら生きてきた64年の、なんと皮相であることよ。

連載し始めてしばらく経ったころであった。それがいつであったか、正確に思い出すことはできない。アルツハイマー病の初期段階は「脳のどこかにある記憶を引き出せない状態」であるという。だとすれば、と納得する。私は見事にその定義に該当している。

「(連載のことを)奥さんは知っちゅうが」と数人の方から問われた。

「知らんろう、いうてもないから」と答えた記憶。知られれば、また叱られるのは必定。自己防衛するしかなかった。心理学には「自己防衛本能が強い人は自己肯定感が低い」とする観点がある。だとすれば、と納得するしかない。私は見事にその定義に該当している。歓ぶべきか、哀しむべきか。

しかしながら、である。遂に訪れたXデー。高退協ニュース223号「今も妻に叱られながら」が発行された晩夏の夕刻であった。食卓にはメジカの刺身と仏手柑。須崎市に愛着が湧くとするならば、このひとときといってよい。

「私が悪妻になっているじゃないの」と叱られた。

咀嚼を忘れるほどの驚愕。辛うじて「してないよ、だって」と応じた。

「だって？　なによ」

「素敵なあなたを見てみたいという人がいるんだから」

事実、妻を見たいという方が事務局にいらっしゃった。

「ばか。わたしを見せ物にするつもりなの」

ふたたび、叱られてしまった。

「行間を読みとってよ。深い愛情が雅やかに漂っているじゃないか」

「だったら」と妻の辛辣な追及。

「どうして、行間なの。どうして、直接書かないのよ」

それが、と返答した。「文学なんだよ」

「勝手な文学ね、まったく」

またしても、私を叱る妻。想像力にやや欠けている無粋な熟女だけど、私にはかけがえのない存在であるということを書き添えておきたい。

三谷隆彦先生の訃報に接したのはずいぶん後のことであった。故あって事務局を退いた3月以降の疎遠を深く恥じ入るとともに、世の無常を恨むしかない。だが先生によせていただいた仁愛の数々は今も鮮明に思い起こすことができる。忘れることはできない。

高退協ニュース228号『勝負下着』で妻に叱られたこと」が発行された翌々日のことであった。

「土居さん、奥さんの下着は赤かよ。えいのう」

三谷先生からのいつもの電話。ニュース発行の直後には必ず連絡をくださった。春風馳湯のお人柄。

「えいですか。でも、また叱られましたよ」

「かまん。かまん」

「先生も奥様にお願いしたらどうですか」

なにげなく、口を滑らしてしまった。大先輩に対する非礼な言動。恐々として携帯電話を握りしめていると、先生は、

「おもしろいことをいうのう」続いて、「ヒッヒッヒッ」と笑われた。

閑達とはこういうことなのだと思い知らされた瞬間。寛容さにも項垂れるしかなかった。「わび」「さび」を解する、稀有で、偉大な先達であった。

もうひとつ。機関誌『こうたいきょう』(第42号)が発刊された数日後。私の拙い一首「珈琲を運ぶ少女の硬質の声高くして払暁近し」に対しての問い合わせ。

「『払暁』を辞書で調べたがよ。わしは『黎明』は知っちょったけんど」

「すごいですね。頭がさがります」

「土居さんの文章は勉強になるぜよ」

9月6日発行のニュースに掲載された奥様の手記を涙しながら拝読。ご夫妻の比翼連理の比類なさに感極まって、涙止まらず。先生の生きざまを象徴することば、「学ぶ心は若若し／森羅万象／みな師となりて」に魂を揺さぶられ、さらなる涙、滂沱の如く。

三谷先生、「妻に叱られた」シリーズ(?)はまだ続けてもかまいませんか。

「春風馳湯のお人柄」だった三谷隆彦さんのありし日の姿